―国内動向―

1　東京都･大阪市中央卸売市場の需給動向（令和8年5月）

【ポイント】

●気温は、北・東・西日本でかなり高かった。降水量は、東・西日本太平洋側と西日本日本海側で少なかった一方、北・東日本日本海側と沖縄・奄美では多かった。日照時間は、東・西日本日本海側でかなり多く、北日本日本海側と北・東・西日本太平洋側で多かった。
●東京都中央卸売市場における野菜の入荷量は11万726トン、前年同月比97.7%、価格は１キログラム当たり284円、同102.9%となった。
●大阪市中央卸売市場における野菜の入荷量は３万2610トン、前年同月比87.1%、価格は１キログラム当たり265円、同110.4%となった。
●７月は、産地が切り替わる重要な時期であるが、特別に供給がタイトになる場面はないと予想され、価格は平年並みと見込まれる。

（１）気象概況

上旬は、前線を伴った低気圧がたびたび日本付近を通過し、全国的に天気は数日の周期で変わった。２日頃や４日頃には、日本海や北海道の北を通過した低気圧や寒気の影響で、北日本を中心に雨が強まり、大雨となった所や北海道では降雪を観測した所もあった。一方、沖縄・奄美では旬の中頃以降は、沖縄の南から日本の南海上に停滞した梅雨前線の影響を受けやすかった。このため、旬降水量は、北日本日本海側、北日本太平洋側、沖縄・奄美でかなり多く、東日本日本海側と東日本太平洋側で多かった。奄美地方では３日頃、沖縄地方では４日頃に梅雨入りしたとみられる（速報値）。

旬間日照時間は、本州付近は西日本を中心に移動性高気圧に覆われた日も多かったため、北・西日本太平洋側と東・西日本日本海側で多かった。

旬平均気温は、北・東日本では旬の後半を中心に暖かい空気に覆われやすく、北日本でも真夏日となる所もあった一方、西日本と沖縄・奄美を中心に冷涼な空気に覆われやすかったため、北・東日本では高く、西日本と沖縄･奄美では低かった。

中旬は、本州付近を中心に高気圧に覆われやすく、晴れた日が多かった。このため、北･東･西日本日本海側と北･東･西日本太平洋側では、旬降水量はかなり少なく、旬間日照時間はかなり多かった。旬降水量は、東日本日本海側で平年比２%となり、1946年の統計開始以降、５月中旬として１位の少雨となった。

旬間日照時間は、東日本日本海側で平年比171%、東日本太平洋側で173%、西日本日本海側と西日本太平洋側でそれぞれ166%となり、1961年の統計開始以降、いずれもこの時期として１位の多照となった。また、沖縄・奄美では、梅雨前線や湿った空気の影響で曇りや雨の日が多かったが、旬の中頃以降は高気圧に覆われて晴れた日もあったため、旬間日照時間が多かった。

旬平均気温は、晴れた日が多く、また、暖かい空気が流れ込みやすかったため、北・東・西日本ではかなり高かった。特に、18日には東日本や西日本で、19日には北日本で猛暑日を観測した所があるなど、５月としての日最高気温の高い方からの極値を更新した地点もあった。旬平均気温の平年差は、東日本で＋2.3度、西日本で＋2.1度となり、1946年の統計開始以降、いずれも５月中旬として１位の高温となった。

下旬は、日本付近は移動性高気圧と太平洋高気圧の間で気圧の谷となりやすかった。

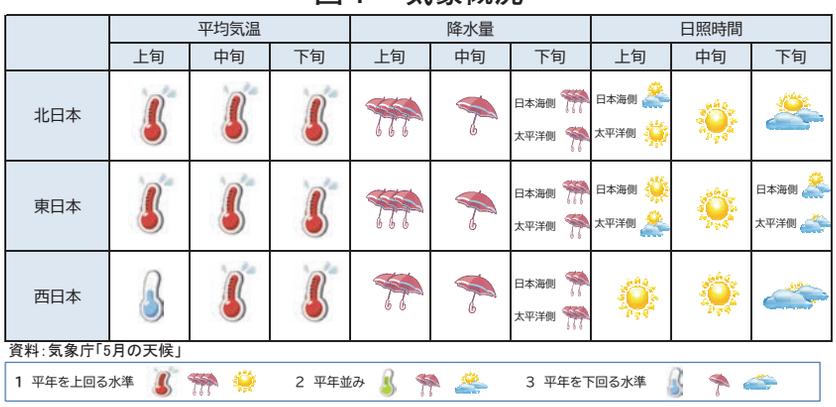
旬降水量は、北・東・西日本では低気圧や前線の影響を受けやすく、大雨となった所もあったため、北・東日本日本海側でかなり多く、西日本太平洋側で多かった。

旬間日照時間は、東・西日本太平洋側と西日本日本海側で少なかった。沖縄・奄美では、高気圧に覆われた日もあったが、梅雨前線や湿った空気の影響を受けた日があり、23日には沖縄本島地方で線状降水帯が発生した。

旬平均気温は、暖かい空気が流れ込みやすかった東・西日本と沖縄・奄美でかなり高く、北日本で高かった。東・西日本では、旬平均気温の平年差が東日本で＋1.8度、西日本で＋2.6度となり、1946年の統計開始以降、いずれも５月下旬として１位の高温となった。

旬別の平均気温､降水量､日照時間は図１の通り。

図１　気象概況



資料：気象庁「5月の天候」

（2）東京都中央卸売市場

東京都中央卸売市場における野菜の入荷量は11万726トン、前年同月比97.7%、価格は１キログラム当たり284円、同102.9%となった（表１）。

表１　東京都中央卸売市場の動向（５月速報）

品　目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格（円/kg）の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	110,726	97.7	93.6	284	102.9	103.9	299	285	272
だいこん	6,754	94.5	88.4	109	102.7	103.3	109	108	111
にんじん	6,715	98.6	90.8	145	81.2	87.4	156	138	144
はくさい	6,172	95.4	97.8	62	118.7	87.0	70	59	58
キャベツ類	14,209	90.9	85.2	105	133.6	108.1	109	113	97
ほうれんそう	1,483	103.5	101.4	445	101.6	100.1	418	461	456
ねぎ	3,405	95.6	91.2	368	90.5	86.5	337	373	389
ブロッコリー	2,412	67.5	83.5	511	133.6	122.8	470	587	486
レタス類	6,238	86.4	90.3	174	138.1	110.6	186	175	163
きゅうり	7,061	103.3	94.2	305	109.8	113.9	361	311	262
なす	2,617	91.9	84.2	430	119.8	108.9	502	430	387
トマト	6,276	84.5	79.6	389	110.1	117.9	387	388	393
ピーマン	2,425	89.3	88.3	564	120.0	116.2	599	562	540
ばれいしょ	9,622	118.5	112.9	200	80.5	92.4	297	198	146
さといも	120	103.6	72.8	453	99.0	107.2	418	420	513
たまねぎ	11,658	134.6	114.3	117	73.3	80.2	156	116	90

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」
注１：平年比は過去５カ年（令和３～７年）平均との比較。
注２：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの９市場のデータである。

根菜類は、にんじんの価格が、高値で推移した前年を２割近く下回り、平年を１割以上下回った（図２）。

葉茎菜類は、ブロッコリーの価格が、堅調に推移し、やや安値で推移した前年を３割以上上回り、平年を２割以上上回った（図３）。

果菜類は、トマトの価格が月間を通して堅調に推移し、やや高値で推移した前年を１割ほど上回り、平年を２割近く上回った（図４）。

土物類は、たまねぎの価格が下旬に向けて下落傾向で推移し、高値で推移した前年を３割近く下回り、平年を２割ほど下回った（図５）。

なお、品目別の詳細については表２の通り。

図２　にんじんの入荷量と卸売価格の推移

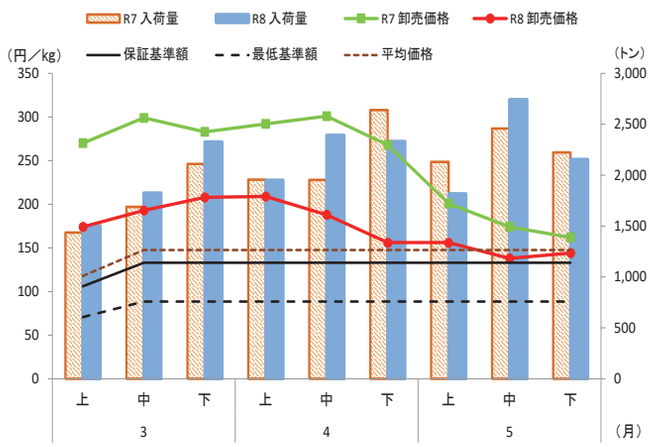


図３ブロッコリーの入荷量と卸売価格の推移

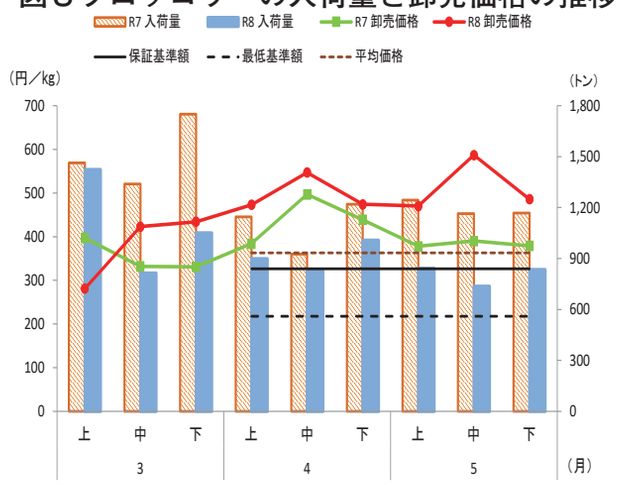


図４　トマトの入荷量と卸売価格の推移

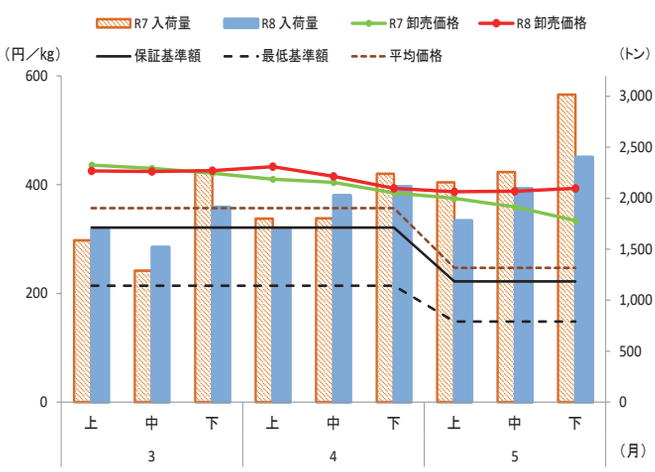
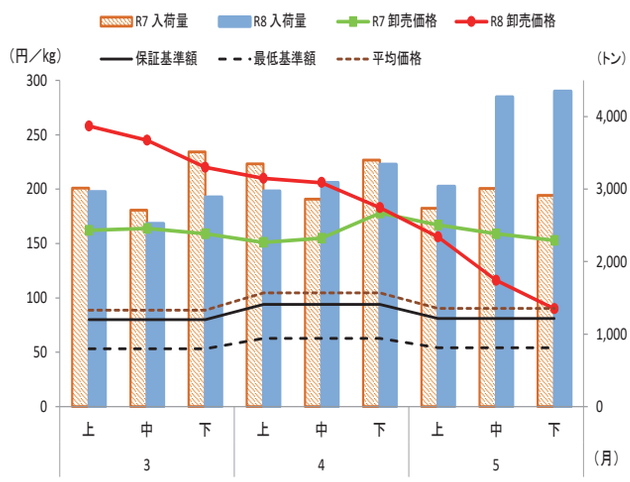


図５　たまねぎの入荷量と卸売価格の推移



資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

注１：卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。

注２：平均価格とは、事業における過去６カ年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数などを加味した価格である。

注３：事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表２　品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	5月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん	千葉産を中心に茨城産などの入荷があった。千葉産の作付面積は前年並みで、適度な降雨と気温の上昇から生育は順調で、一部前進による抽苔（ちゅうだい）が懸念される。一部で黒斑病が散見されたが、大きな影響はない。茨城産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調だが、乾燥の影響により正品率が低下している。総入荷量は、少なかった前年をやや下回り、平年を1割以上下回った。 価格は、大きな値動きはなく、前年をわずかに上回り、平年をやや上回った。
	にんじん	徳島産を中心に千葉産などの入荷があった。徳島産の作付面積は前年並みで、生育は乾燥傾向で停滞していたが、その後の気温の上昇で回復し、おおむね順調である。千葉産の作付面積は前年並みで、播種（はしゅ）期の低温・乾燥で、初期生育の遅延が散見されたが、適度な降雨と気温の上昇により回復傾向である。多雨の影響による病害が散見される。輸入の中国産は、前年を3割以上下回った。総入荷量は、少なかった前年をわずかに下回り、平年を1割近く下回った。 価格は、高値で推移した前年を2割近く下回り、平年を1割以上下回った。
葉茎菜類	はくさい	茨城産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、4月からの気温の上昇と多雨から、生育はやや前進しているが、歩留まりは低下している。後続の長野産は、定植時は低温の影響を受けたが、その後は回復して生育順調であり、中旬から出荷を開始した。総入荷量は、前年をやや下回り、平年をわずかに下回った。 価格は、長野産の入荷が始まった中旬以降落ち着き、大幅な安値で推移した前年を2割近く上回り、平年を1割以上下回った。
	キャベツ類	千葉産を中心に愛知産、神奈川産、茨城産などの入荷があった。千葉産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調である。やや虫害が散見される。愛知産の作付面積は前年並みで、適度な降雨と気温に恵まれ、生育は順調でやや前進している。出荷量は、中旬以降減少した。神奈川産の作付面積は、前年をやや下回っている。3月後半からの気温の上昇と適度な降雨により、生育は7～10日ほど前進している。出荷量は、中旬以降減少した。茨城産の作付面積は前年並みで、降雨と気温の上昇により、生育は前進傾向となっている。総入荷量は、少なかった前年を1割近く下回り、平年をかなり大きく下回った。 価格は、下旬には落ち着いたものの、安値で推移した前年を3割以上上回り、平年を1割近く上回った。
	ほうれんそう	群馬産、茨城産が中心の入荷であった。群馬産の作付面積は前年並みで、高冷地露地作は、気温の上昇と適度な降雨により、やや前進傾向である。平坦地の圃（ほ）場（じょう）では一部で病虫害が散見されるが、生育はおおむね順調であった。茨城産の作付面積は前年並みで、適度な降雨と気温の上昇により、生育は順調で前進傾向にある。高温・多湿による品質低下が懸念される。総入荷量は、前年をやや上回り、平年をわずかに上回った。 価格は、前年をわずかに上回り、平年並みとなった。
	ねぎ	茨城産を中心に千葉産などの入荷があった。茨城産の作付面積は、前年並みであった。夏ねぎを中心に、適度な降雨と気温の上昇により生育は順調で、肥大も良好でサイズは2Lが中心となっている。千葉産の作付面積は前年並みで、4月の適度な降雨と気温の上昇により肥大は良く、生育は順調である。虫害が平年より早く見られている。輸入の中国産は、前年を4割近く下回った。総入荷量は、少なかった前年をやや下回り、平年を1割近く下回った。 価格は、気温の上昇に伴う需要減退から上旬に下がり、中旬以降は回復傾向にあったものの、前年を1割近く下回り、平年を1割以上下回った。
	ブロッコリー	香川産を中心に埼玉産、熊本産、長崎産などの入荷があった。香川産の作付面積は前年並みで、気温の上昇と降雨により前進している。生育は、軟弱傾向で減少ペースが早く、病虫害が散見される。埼玉産の作付面積は前年並みで、低温・乾燥で遅れていた初期生育は、気温の上昇と降雨により回復し、順調である。熊本産の作付面積は前年並みで、生育は順調で前進している。高温・多雨による品質低下とも相まって、中旬以降、出荷は減少した。長崎産の作付面積は前年並みで、生育はやや前進しており、病害が散見される。総入荷量は、やや多かった前年を3割以上下回り、平年を2割近く下回った。 価格は、堅調に推移し、やや安値で推移した前年を3割以上上回り、平年を2割以上上回った。

	レタス類	長野産、群馬産を中心に茨城産の入荷があった。長野産の作付面積は前年並みで、定植後の低温による生育停滞は、4月以降の適度な降雨と気温の上昇で回復し、おおむね順調である。群馬産の作付面積は前年並みで、初期生育は低温の影響を受けたが、気温の上昇に伴い回復した。乾燥の影響での玉ぞろい不良は、後半には回復した。茨城産の作付面積は前年並みで、適度な降雨に恵まれて生育は順調であった。総入荷量は、前年を1割以上下回り、平年を1割近く下回った。 価格は、下旬に向け少しずつ落ち着いたものの、安値で推移した前年を4割近く上回り、平年を1割以上上回った。
果菜類	きゅうり	埼玉産、群馬産を中心に宮崎産、千葉産などの入荷があった。埼玉産の作付面積は前年並みで、気温と湿度が高く、生育は順調であった。一部で病害が散見されたが、大きな影響はない。群馬産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調だが、病虫害が散見された。宮崎産の作付面積は前年並みで、一部で樹勢の低下が散見されたものの、生育はおおむね順調であった。千葉産の作付面積は前年並みで、越冬・半促成作では着果負担により樹勢が低下し、病害が散見された。総入荷量は、少なかった前年をやや上回り、平年をやや下回った。 価格は、下旬に落ち着いたものの、やや高値で推移した前年を1割近く上回り、平年を1割以上上回った。
	なす	高知産を中心に群馬産などの入荷があった。高知産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調であった。気温の上昇と日照時間の増加から着果は増えているものの、着果負担による樹勢の低下が散見された。一部の圃場で病害の拡大が散見されるが、大きな影響はない。群馬産の作付面積は前年並みで、天候の安定から生育は順調であり、一部で虫害が散見される。総入荷量は、前年を1割近く下回り、平年をかなり大きく下回った。 価格は、上旬は高値で推移し、中旬以降は落ち着いたものの、安値で推移した前年を2割近く上回り、平年を1割近く上回った。
	トマト	熊本産、栃木産を中心に愛知産などの入荷があった。熊本産の作付面積は前年並みで、病害が一部で散見されているが、生育はおおむね順調であった。栃木産の作付面積は前年並みで、促成作の生育はおおむね順調であるが、気温の上昇に伴い病虫害が散見された。冬春作は日照に恵まれ、肥大がよく生育は順調である。愛知産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調だが、虫害が増加傾向である。総入荷量は、少なかった前年をかなり大きく下回り、平年を2割近く下回った。 価格は、月間を通して堅調に推移し、やや高値で推移した前年を1割ほど上回り、平年を2割ほど上回った。
	ピーマン	茨城産が中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、4月下旬から曇雨天が続いた影響により、一部で花落ちが散見されているほか、収穫遅れが散見される。総入荷量は、前年、平年ともに1割強下回った。 価格は、中旬以降落ち着いたものの、前年を2割上回り、平年を大幅に上回った。
土物類	ばれいしょ	長崎産、鹿児島産が中心の入荷であった。長崎産の作付面積は前年並みで、気候が安定して生育は全体的に前進し、病虫害（えき）も少なく順調である。鹿児島産の作付面積は前年を下回り、一部の産地では疫病の発生や、乾燥の影響もあり、その後の天候で回復傾向にはあるものの、生育の遅延が散見される。総入荷量は、やや少なかった前年を2割近く上回り、平年を1割以上上回った。 価格は、下旬に向け下落傾向で推移し、高値で推移した前年を2割ほど下回り、平年を1割近く下回った。
	さといも	千葉産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、収穫は終了し、貯蔵物からの出荷であるが、残量も少ない。鹿児島産、宮崎産については、商系の出回りが大部分を占める。輸入の中国産は、前年を下回っている。総入荷量は、少なかった前年をやや上回り、平年を3割近く下回った。 価格は、需要期からは外れてきているものの堅調に推移し、高値で推移した前年をわずかに下回り、平年をかなりの程度上回った。
	たまねぎ	佐賀産を中心に兵庫産などの入荷があった。佐賀産の作付面積は前年並みで、気温の上昇と降雨により生育は順調で、肥大も良好である。病虫害の発生が散見される。兵庫産の作付面積は前年並みで、適度な降雨により玉肥大は良好で、サイズは2L中心の出荷となっている。やや前進傾向だが、乾燥不足による品質不良が散見される。輸入の中国産は前年をわずかに上回り、ニュージーランド産は7割以上上回った。総入荷量は、少なかった前年を3割以上上回り、平年を1割以上上回った。 価格は、豊作基調から下旬に向けて下落傾向で推移し、高値で推移した前年を3割近く下回り、平年を2割ほど下回った。

（執筆者：東京シティ青果株式会社　平田　実）

（3）大阪市中央卸売市場

大阪市中央卸売市場における野菜の入荷量は３万2610トン、前年同月比87.1％、価格は１キログラム当たり265円、同110.4％となった（表３）。

品目別の詳細については表４の通り。

表３　大阪市中央卸売市場の動向（５月速報）

品　目	入荷量（t）	前年比（%）	平年比（%）	価格（円/kg）	前年比（%）	平年比（%）	価格（円/kg）の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	32,610	87.1	88.7	265	110.4	106.9	271	264	261
だいこん	2,019	89.1	90.3	110	122.4	114.6	105	105	120
にんじん	2,058	85.0	82.7	120	87.5	86.5	132	114	114
はくさい	2,742	83.0	92.4	75	129.3	85.1	90	70	68
キャベツ類	4,182	74.7	83.1	104	146.5	111.6	97	108	106
ほうれんそう	410	88.9	85.4	601	107.9	108.6	586	599	616
ねぎ	696	96.1	111.2	459	108.7	97.1	425	456	493
ブロッコリー	482	77.2	87.8	486	139.3	129.9	457	588	442
レタス類	1,417	80.2	87.7	179	143.2	110.5	183	190	167
きゅうり	1,441	96.8	86.9	282	111.4	110.3	336	286	244
なす	1,045	91.8	97.7	381	109.3	103.3	404	392	357
トマト	1,879	90.6	90.9	360	107.0	111.7	350	358	370
ピーマン	649	76.7	99.2	506	124.7	115.0	567	521	455
ばれいしょ	2,728	85.6	80.1	191	81.8	93.1	273	184	132
さといも	24	154.0	100.0	547	72.9	94.2	430	530	683
たまねぎ	4,200	101.7	95.8	114	77.4	82.7	156	101	88

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」
注１：平年比は過去５カ年（令和３～７年）平均との比較。
注２：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表４　品目別入荷量・価格の動向（大阪市中央卸売市場）

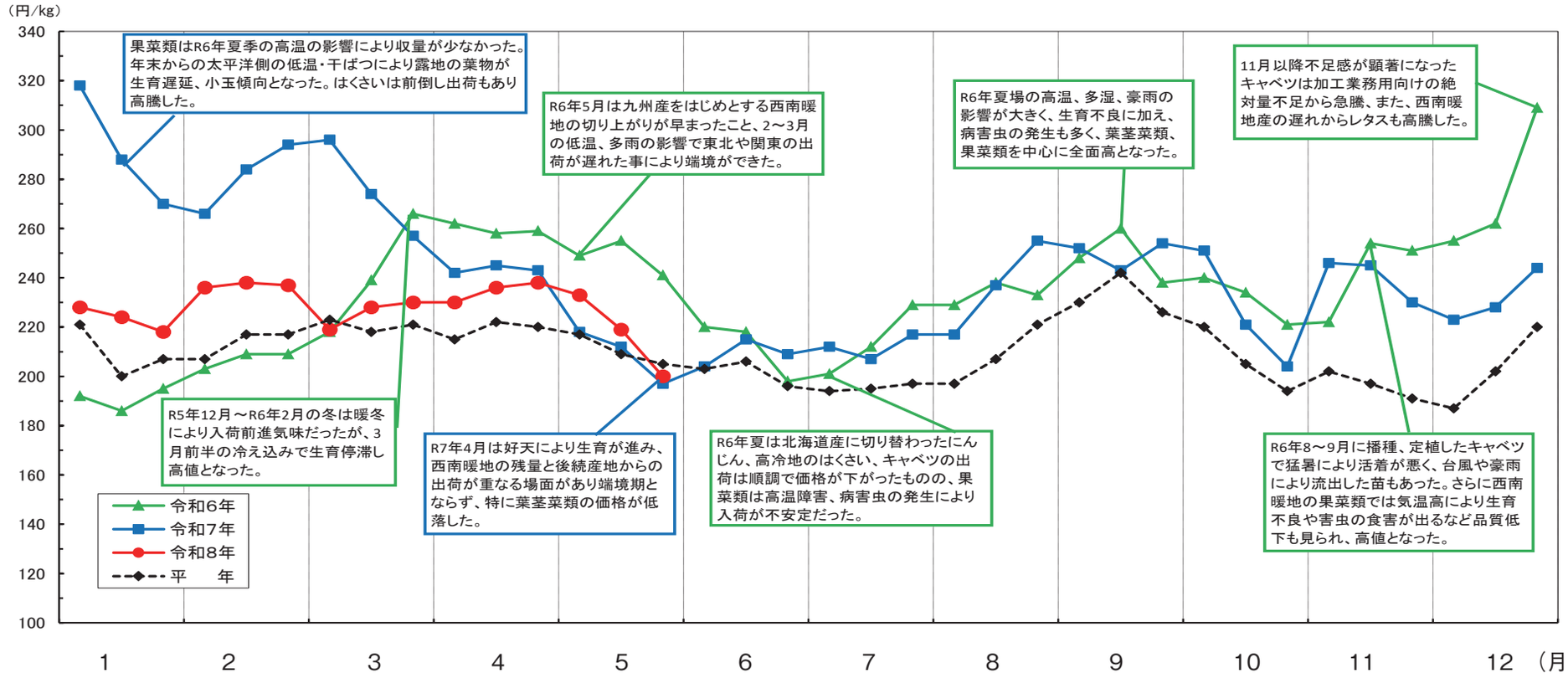
類別	品目	5月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん	和歌山産と香川産を中心に、主力の鹿児島産、長崎産や千葉産などの入荷があった。気温高が続き生育は前進傾向で、香川産は切り上がりが早く、中旬以降は入荷減量となり、月間では前年をかなり下回った。長崎産は作柄不良から中旬以降の入荷量は激減し、月間では前年の半分程度にとどまった。他産地でも出荷量は伸び悩み、月間全体の入荷量は、前年、平年ともに1割程度下回った。 価格は、不足感から高値推移となり、後続産地の出遅れもあって、下旬にはさらに上伸した。月間では、前年を2割以上上回り、平年をかなり大きく上回った。
	にんじん	主力の徳島産を中心に、長崎産や兵庫産の入荷があった。気温高が続き、前進傾向で徳島産の切り上がりが早く、下旬の入荷量は前年を大きく下回った。長崎産も出荷量が少なく、月間の入荷量は前年をかなり下回った。月間全体の入荷量は、前年をかなり大きく下回り、平年を大幅に下回った。 前月まで前進傾向だった中で太物が少なく、価格が伸びないまま単価安が続いた。産地の移行に伴い、中旬以降はさらに下落した。月間の価格は、前年、平年ともにかなり大きく下回った。

葉茎菜類	はくさい	上・中旬は主力の茨城産が中心となり、下旬は、中旬から入荷開始した長野産が主体となった。気温高で前進出荷が続いていた茨城産は、干ばつの影響もあり、旬を追うごとに入荷減量となり、下旬は前年の半分程度にとどまった。長野産も前進し、入荷開始から量は多かったものの、全体としては伸び悩んだ。月間全体の入荷量は、前年を大幅に下回り、平年をかなりの程度下回った。 価格は、不足感から高値スタートであったが、長野産の出荷が始まったことで、旬を追うごとに下落した。月間の価格は、極端な単価安だった前年を3割近く上回り、平年をかなり大きく下回った。
	キャベツ類	主力の愛知産が中心となり、茨城産などの入荷があった。愛知産は、上・中旬は潤沢な産地出荷が続いたが、干ばつの影響で減少し、前進出荷したこともあり、下旬が伸びなかった。月間全体の入荷量は少なく、前年を2割以上下回り、平年を大幅に下回った。 価格は、不足感から高値のまま推移し、中旬以降に高騰した。月間では前年を5割近く上回り、平年をかなり大きく上回った。
	ほうれんそう	岐阜産が中心となる入荷であった。近隣の大阪産や奈良産の入荷もあったが、奈良産は作付面積が減少しており、出荷量が少なかった。岐阜産は生育良好で安定した出荷が続き、旬を追うごとに入荷増量となった。月間全体の入荷量は、前年、平年ともにかなり大きく下回った。 価格は、消費地の気温が高く需要が高まる中での不足感から、旬を追うごとに上伸した。月間では、前年、平年ともにかなりの程度上回った。
	ねぎ（白ねぎ）	主力の鳥取産を中心に、茨城産の入荷があった。中旬までは群馬産や埼玉産の残量入荷もあった。鳥取産は順調な出荷が続き、旬を追うごとに入荷増量となり、月間では前年を大幅に上回った。月間全体の入荷量は、前年を上回った。 価格は、入荷量が多い中でも一定の需要があり、旬を追うごとに微増傾向となったが、月間では前年をやや下回った。
	ねぎ（青ねぎ）	青ねぎは徳島産が中心となり、高知産や香川産などの入荷があった。近隣の奈良産や大阪産の入荷もあった。細ねぎは高知産と静岡産の入荷であった。各地とも干ばつ傾向から生育不良となり、産地出荷量が少ない状況が続いた。また、品質低下も見られ、入荷量も全旬を通じて少ない状況となった。月間全体の入荷量は、前年をかなり下回った。 価格は、消費地の気温が高く需要が高まる中で絶対量不足から高騰し、旬を追うごとに上昇し高値で推移した。月間の価格は前年を大きく上回った。
	ブロッコリー	徳島産が中心となる入荷に、下旬から後続の石川産の入荷があった。徳島産は作柄不良で正品率が悪く、出荷量は伸びず、月間の入荷量は前年を大幅に下回った。石川産は前進気味で入荷開始し、前年を大きく上回った。月間全体の入荷量は、前年を2割以上下回り、平年をかなり大きく下回った。 価格は、不足感から高値で推移し、月間では前年を4割近く上回り、平年を3割近く上回った。
	レタス類	玉レタスは長野産が中心となる入荷で、月の前半は兵庫産の残量入荷などもあった。干ばつの影響により出荷が伸びず、上・中旬は入荷量の少ない状況が続いた。下旬から増量傾向となったが、月間全体では前年をかなり下回った。サニーレタスは長野産が中心となる入荷で、月の前半は福岡産の残量入荷などもあった。長野産は干ばつの影響で出荷量が伸びない中、旬を追うごとに入荷増量となり、月間では前年並みとなった。福岡産は、残量過多で入荷量が多かった前年を大きく下回った。月間全体では、前年をやや下回った。リーフレタスも長野産が中心となる入荷で、月の前半は福岡産の残量入荷などもあった。サニーレタス同様、干ばつの影響を受けた長野産は、出荷量が伸びない中でも旬を追うごとに入荷増量となったが、福岡産の残量が少なく、全体では前年をかなり下回った。レタス類全体の入荷量は、前年を2割近く下回り、平年をかなり大きく下回った。 玉レタスの価格は、不足感から高騰し高値で推移した。サニーレタスとリーフレタスも、玉レタスの高値の影響もある中で不足感から旬を追うごとに上伸し、月間では前年の2倍近い価格となった。レタス類全体の価格は、前年を4割以上上回り、平年をかなりの程度上回った。

果菜類	きゅうり	宮崎産が中心となり、高知産や徳島産などの入荷があった。下旬には、後続の福島産の入荷も見られた。前月の悪天候の影響が残り、出荷量が少ない状況が続いた。月間全体の入荷量は、少なかった前年をやや下回り、平年をかなり大きく下回った。 価格は、不足感から高値で推移し、旬を追うごとに下落傾向となる中で、消費地の気温が高く需要も高まり、月間の価格は、前年、平年ともに1割程度上回った。
	なす	千両系は、高知産を中心に大阪産や岡山産の入荷があった。長なすは、福岡産と熊本産が主体となる入荷であった。5月の大型連休前後の入荷量が少なく、月の後半に回復傾向となった。各産地とも、入荷は旬を追うごとに増量傾向であったが、月間の入荷量は伸び悩んだ。月間全体の入荷量は、前年をかなりの程度下回り、平年をわずかに下回った。 価格は、不足感から高値で推移し、旬を追うごとに微落したが、月間では前年をかなりの程度上回り、平年をやや上回った。
	トマト	愛知産が中心となり、主力の熊本産や福岡産の入荷があった。後続の石川産が下旬に入荷開始した。気温高が続く中で前進出荷傾向となり、冬春産地の切り上がりが早く、旬を追うごとに入荷微増傾向の中でも伸び悩んだ。月間全体の入荷量は、前年、平年ともにかなりの程度下回った。 価格は、入荷量が伸び悩む中、旬を追うごとに上昇傾向となり、気温高で一定の需要があり、大玉を中心に順調な販売が続いた。月間価格は、前年をかなりの程度上回り、平年をかなり大きく上回った。
	ピーマン	宮崎産と高知産が主体となる入荷であった。日中の気温は高い中でも朝晩は低温となる日があり、産地出荷量は伸び悩んだ。旬を追うごとに入荷微増傾向であったが、月間全体の入荷量は伸び悩み、多かった前年を2割以上下回り、平年をわずかに下回った。 価格は、不足感から高値で推移し、旬を追うごとに微落傾向であったが、月間の価格は、安値だった前年を2割以上上回り、平年をかなり大きく上回った。
土物類	ばれいしょ	丸芋は長崎産が主体となり、中旬までは鹿児島産の入荷もあった。前月末の悪天候からのずれ込みもあり、連休後半から出荷量が増えたが、気温高もあり需要は少なく、消費が鈍かったため発注が止まり、入荷は減量した。メークインは、長崎産と鹿児島産の入荷であった。作付け自体が減少している中でも、連休後半から入荷増量となったが、需要がなく入荷量は伸びなかった。ばれいしょ全体の入荷量は、前年をかなり大きく下回り、平年を2割程度下回った。 価格は、連休後の入荷急増に伴って急落し、旬を追うごとに下落を続け、安値で推移した。需要がなく入荷量が減少していく中で単価安が続いたが、売れ行きは悪く、月間の価格は前年を2割近く下回り、平年をかなりの程度下回った。
	さといも	愛媛産は上旬で切り上がり、後続の鹿児島産が中旬からの入荷となった。鹿児島産は前年よりも1週間ほど遅れてのスタートとなったが、産地出荷は順調であった。国産が少ない時期で、輸入の中国産の入荷が主体となったが、量はそれほど多くなかった。月間全体の入荷量は、極端に少なかった前年を5割以上上回り、平年並みだった。 価格は、安定した入荷と気温高で需要が伸びず単価安で推移したが、旬を追うごとに上伸した。月間の価格は、高値だった前年を2割以上下回り、平年をやや下回った。
	たまねぎ	兵庫産が中心となり、主力の佐賀産、長崎産の入荷などがあった。各産地とも前月下旬の天候不順から出荷が5月上旬の連休明けにずれ込み、中旬に入荷増量となった。九州産は下旬に向けて切り上がり、兵庫産も中旬の入荷増量の反動から下旬に入荷減となった。また、干ばつの影響で小玉傾向となり、入荷量は伸びなかった。月間全体の入荷量は、前年をわずかに上回り、平年をやや下回った。 価格は、入荷増量に伴って中旬以降に急落し、旬を追うごとに下落を続けた。月間の価格は、前年を2割以上下回り、平年を大幅に下回った。

（執筆者：東果大阪株式会社　新開　茂樹）

（参考）　指定野菜（15品目）の卸売価格の推移（東京都中央卸売市場）

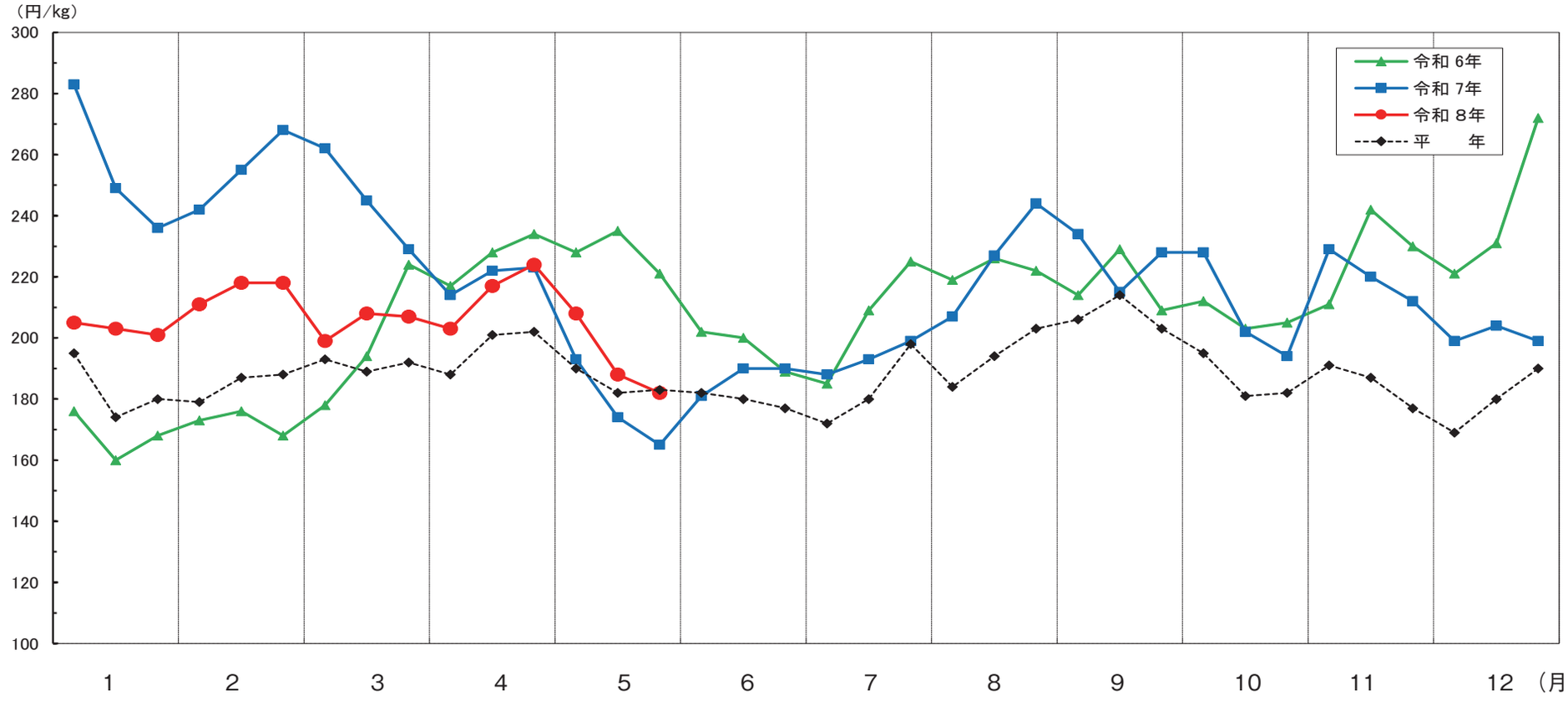


（単位：円／kg）

	1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
令和６年	188	180	188	195	202	204	210	230	255	251	249	249	240	245	237	212	210	191	193	206	221	223	232	228	240	253	231	231	227	215	215	244	243	245	252	295
令和７年	306	279	260	257	274	285	290	270	253	236	236	235	212	205	191	196	206	199	204	199	211	211	232	249	243	233	246	242	212	196	236	236	222	215	220	237
令和８年	222	215	210	229	231	233	215	221	223	230	236	238	233	219	200																					
平　　年	214	193	199	200	210	211	216	213	215	211	218	216	214	206	202	200	202	193	191	192	194	194	204	219	226	238	223	216	202	191	199	193	187	183	199	216

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」
注１：平年とは、過去５カ年（令和３年～７年）の旬別価格の平均値である。
注２：豊洲市場、大田市場、豊島市場、淀橋市場の４市場のデータである。
注３：令和８年６月号（４月実績掲載分）以降、指定野菜はブロッコリーを含む15品目のデータである。なお、平年、令和６年、７年のデータもブロッコリーを含む。

（参考）　指定野菜（15品目）の卸売価格の推移（大阪市中央卸売市場）



（単位：円／kg）

	1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
令和６年	173	156	165	170	173	165	174	191	219	214	224	229	223	230	217	197	196	186	180	205	221	215	222	219	210	225	205	208	199	201	206	237	226	216	225	264
令和７年	278	245	231	238	249	263	259	243	227	211	218	220	190	170	161	175	185	185	183	189	195	203	224	241	230	211	224	223	198	189	222	214	207	194	198	195
令和８年	201	198	197	207	215	215	196	204	203	203	217	224	208	188	182																					
平　　年	191	171	176	176	183	184	189	187	190	185	198	198	187	179	179	176	176	173	167	175	194	180	190	200	202	209	198	191	177	177	187	183	173	166	176	186

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」
注１：平年とは、過去５カ年（令和３年～７年）の旬別価格の平均値である。
注２：大阪本場及び大阪東部市場のデータである。
注３：令和８年６月号（４月実績掲載分）以降、指定野菜はブロッコリーを含む15品目のデータである。なお、平年、令和６年、７年のデータもブロッコリーを含む。